

報 告

第23回北関東医学会奨励賞

平成8年に創設された北関東医学会奨励賞の今年度、第23回受賞者の募集が本会機関誌「The KITAKANTO Medical Journal」第69巻1号で行なわれた。理事会の決定により組織された北関東医学会奨励賞選考委員会（以下、選考委員会）が4月25日に行われ、奥石一郎選考委員長長の議事進行の下、始めに選考方針の確認を行った。その結果、前年の方針に倣い、評価基準を1. 科学、臨床、保健医学上での重要性、2. 将来の発展性、3. 独創性、4. 北関東医学会・地域に対する貢献度、5. 論文全体にあらわれた業績とした。また、受賞年齢上限を厳格に適用することとした。続いて、候補者の選考に移り、選考委員に予め検討を依頼してあった各候補者の推薦書と「業績の課題」に関する論文2篇をもとに厳正なる審査を行った。その結果、受賞候補者として篠原洋一郎氏（群馬大学医学部附属病院眼科）、松村 望氏（群馬大学大学院医学系研究科病態病理学）、三浦陽介氏（群馬大学医学部附属病院呼吸器・アレルギー内科）を選出し、篠原氏、松村氏、三浦氏の3名を第23回北関東医学会奨励賞受賞候補者として選考した旨を奨励賞規定に基づき会長に答申した。6月19日開催の令和元年度第1回理事会において、この3名の候補者を受賞予定者として決定し、9月27日に開催された令和元年度評議員会に報告した。また、同日の第66回北関東医学会総会会場において執り行われた北関東医学会奨励賞授与式において石崎泰樹会長より篠原洋一郎氏、松村 望氏、三浦陽介氏の3氏に賞状、記念楯および副賞が授与された。

北関東医学会奨励賞受賞者

氏 名 篠原洋一郎

所 属 群馬大学医学部附属病院眼科

最終学歴 群馬大学大学院医学系研究科博士課程修了（平成30年3月）

業 績

- (1) 業績の課題 ウイルスベクターによる生体脳への遺伝子導入
- (2) 研究実地活動等の概要

生体に遺伝子を発現させるには、アデノ随伴ウイルス（AAV）ベクターが有用であり、すでに臨床応用されている。最近ではAAV-PHP.Bベクターが登場し、静脈注射で成体マウスの血液脳関門を透過し、中枢神経系へ高効率かつ広範囲に遺伝子導入することが可能となった。我々はこれまでにAAVベクターを用いてアストロサイト・ニューロン特異的プロモーターを解析し、細胞腫特異的な遺伝子発現を可能とした（PLOS ONE. 2016, Cerebellum. 2017）。さらにAAV-PHP.Bベクターによる遺伝子発現と中和抗体の関連についても明らかにした（Mol Neurobiol 2019）。

- (3) 関連研究・関連活動等の概要

現在、群馬大学医学部附属病院眼科で眼循環を中心とした網膜硝子体疾患の臨床・研究をしている。加えて今後はAAVベクターを用いて難治性網膜疾患における病態解明、さらには遺伝子治療を展開したい。

氏 名 松村 望

所 属 群馬大学大学院医学系研究科病態病理学

最終学歴 群馬大学大学院医学系研究科博士課程修了（平成25年2月）

業 績

- (1) 業績の課題 脳腫瘍の病理と分子遺伝学的解析
- (2) 研究実地活動等の概要

若年成人に発生する稀な高悪性度脳腫瘍である類上皮膠芽腫（E-GBM）の一例において、*BRAF* V600E変異と*TERT* promoter変異という稀な組み合わせの変異を見出した（Neuropathology 2017）ことを契機に、我々はE-GBMの網羅的な遺伝学的解析を行い、*BRAF* V600E変異、*TERT* promoter変異、*CDKN2A/B*の両アリル性欠失がいずれも高頻度に生じていること、さらにこれら3つの遺伝子変異を有するE-GBMが検討症例の半数に認められることを証明した（Brain Pathol 2018）。また小児から若年成人のてんかん原性腫瘍で

ある胚芽異形成性神経上皮性腫瘍 (DNT) において, *FGFR1* 遺伝子のチロシンキナーゼドメインにおける internal tandem duplication (*FGFR1*-ITD) が高頻度に見られることを MLPA 法を用いて証明し, DNT では *FGFR1*-ITD が重要な遺伝子変異の一つであることを明らかにした (J Neurooncol 2019).

(3) 関連研究・関連活動等の概要

今後も脳腫瘍において形態学, 遺伝学双方の観点から個々の組織型に対する理解を深め, 脳腫瘍の性質解明を進めることで脳腫瘍病理学の発展に貢献していきたい.

氏 名 三浦 陽介

所 属 群馬大学医学部附属病院呼吸器・アレルギー内科

最終学歴 群馬大学大学院医学系研究科博士課程修了 (平成 30 年 9 月)

業 績

(1) 業績の課題 進行・再発小細胞肺癌における治療効果予測因子・予後因子の探索研究

(2) 研究実地活動等の概要

再発小細胞肺癌に対する標準療法の一つであるアムルピシン単剤療法の効果予測マーカーは明らかでない. アムルピシンが投与された 83 例の再発小細胞肺癌の臨床検体を用いて, アムルピシンの治療標的である Topoisomerase-II の発現レベルを免疫組織化学染色で評価した. Topoisomerase-II 高発現群では低発現群と比べ無増悪生存期間・全生存期間ともに有意に良好であることが示された (Lung Cancer 2018).

(3) 関連研究・関連活動等の概要

小胞体ストレス応答に関わる GRP78/BiP の発現レベルも, 再発小細胞肺癌に対するアムルピシン療法後の予後と関連することも明らかとなり, 今後論文報告予定である. さらに, アミノ酸トランスポーターである LAT1 や CD98 といった他の分子の意義について検討を進めている.